

1

次の文章を読んで以下の設問に答えなさい (なお、この問題は法学の知識を問うものではない)。

国際関係学の分野では、「デモクラティック・ピース (democratic peace)」という概念が定着している。なおその妥当性の範囲をめぐる議論は行われ続けているが、「デモクラティック・ピース」と呼ばれる現象が、現実の世界に存在していることについては、広範囲に認められ始めている。「デモクラティック・ピース」とは、「民主主義国家は互いに戦争をしない」という命題であるが、19世紀初頭の米英戦争を最後に、実際に一度も民主主義国家は互いに戦争をしておらず、この命題の正しさは歴史的に証明されているという主張が、その根拠になっている。

<中略> 「デモクラティック・ピース」の概念は、多分に分析者の「民主主義国家」の定義によって左右されることになる。たとえば果たして19世紀前半のイギリスおよびアメリカが本当に「民主主義国家」であったかどうかは、必ずしも簡単に断言できる問題ではない。<中略> 仮に19世紀のアメリカが民主主義を十分に達成していたとしても、各州 (State) が凄惨な武力対立を繰り広げた南北戦争をどのように扱うべきかという疑問は、重大な論点となる。南北戦争を考察の対象から外すとすれば、「デモクラティック・ピース」は互いに主権を認め合う諸国家の間の平和だけを意味し、政治共同体 (集団) と他の政治共同体 (集団) との間の平和には係わらないという限定が付せられることになる。内戦が蔓延する現代世界において、この限定は大きなジレンマに陥る。また20世紀になってから多く生まれた共産主義国家のような「自称」民主国家を「民主主義国家」の範疇から除外するためには、分析者の側に民主主義を認定するための十分に「客観的な」指標がなければならないことも、指摘しておかなければならない。

さらに言えば、「民主主義国家」同士が戦争をしていない状態の説明を、「民主主義」という属性に求めるのか、その他の点に求めるのかは、簡単には決めることができない。たとえばアメリカ合衆国とカナダは、長い国境線を共有していながら、「戦争」をしたことがない。これは「デモクラティック・ピース」の典型例だと言われる。しかしそれでは両国の間に全く武力行使を伴う摩擦が存在せず、安全保障上の脅威が存在しなかったかと言えば、それは間違いである。独立戦争時およびその後の時期に、アメリカ連合側は英領カナダに何度となく武装兵を送り込んでいる。カナダを侵略すべきだという議論は、19世紀になってもアメリカ国内に存在していた。そのためカナダ側では、北米大陸の「大国」と接する国境付近の警備を怠ったことはなかった。もちろんカナダが独立し、両国の「民主主義」の度合いが高まるにつれて、両国は互いの警戒心を解くに至った、と言えないこともない。しかしそれは国際社会の安全保障環境の変化によって生まれた現象であったのか (アメリカはイギリスとの対立を安全保障上の理由で避け続けた)、民主制という政治体制上の属性、あるいは民主主義という政治思想上の理由で生まれた現象であったのかを判断するのは、簡単な作業ではない。

また冷戦時代にお互いの間の戦争行為を避け続けていたのは、「自由主義陣営」だけではなく、中国とソ連の離反、およびそれに触発された中国とベトナムの間の衝突などの例を除けば、共産主義陣営内においてもおおむね相互の戦争行為は防がれていたとすることはできる。冷戦時代に関する「デモクラティック・ピース」論は、敵対する2つの陣営のそれぞれの内側において国家間戦争はあまり起きなかった、ということの意味するだけに過ぎない恐れがある。

しかも仮に「デモクラティック・ピース」論の妥当性を認める場合でも、この議論には、「民主主義国家」内の「内戦」には係わらないばかりではなく、「民主主義国家」と「非民主主義国家」の間の戦争についても一切係わらないという限界があることにも、十分な注意が必要である。つまりしばしば誤解されるが、「デモクラティック・ピース」論は、「民主主義国家」が平和主義的であるということ、全く意味しないのである。それはあくまで単に「民主主義国家」同士が戦争をしないという命題でしかない。「民主主義国家」が互いに戦争をしていないということは、「民主主義国家」が平和的であることと、必ずしも同義ではない。

たとえばアメリカという「民主主義国家」が、タリバン政権下のアフガニスタンやフセイン政権下のイラクなどに対して次々に率先して戦争を仕掛けたとしても、それは「デモクラティック・ピース」論の反証にはならない。「民主主義国家」（アメリカ）が、別の「民主主義国家」（イギリス）と戦争を行ったとき初めて、「デモクラティック・ピース」論は動揺することになる。つまり仮に「民主主義国家」は相互に平和的であっても、異質な国家に対しては平和的ではないということは、「デモクラティック・ピース」論の中に、最初から内包されている点なのである。これは、「デモクラティック・ピース」論の反駁ではなく、「暗部」の指摘である。

したがって「デモクラティック・ピース」論は、世界中の国々が民主主義国になって初めて平和を保証するような理論であり、それ以前の段階については、幾つかの諸国の間の戦争の不在を部分的に説明するに過ぎない。逆説的ながら、こうした事情により、「デモクラティック・ピース」論は、対外的な膨張主義を理論的に正当化する要素も持っている。なぜなら民主主義国家になれば互いには戦争をしないのであれば、仮に強制的な手段を用いても、非民主主義国を民主主義国に作り変えることは将来の長期的な平和に役立つ、ということになるからである。平和のための戦争、という論理に、場合によっては妥当性を与えることになるのである。〈中略〉

「デモクラティック・ピース＝民主主義的な平和」という言葉は、決して厳密な概念整理の上で用いられているものではない。それは民主主義が自動的に平和をもたらすということ、実は全く意味していない。むしろ「デモクラティック・ピース」論が示唆するのは、世界中が完全な「民主主義国家」で覆われたときに、あるいは世界大の永続的な平和が訪れるかもしれないという1つの仮説である。そしてその仮説が一際輝くのは、世界中に民主主義を広めるための政治運動を正当化するイデオロギーとして機能するときなのである。

問1 「デモクラティック・ピース」論について説明している上記の問題文について、8～10行でその内容を要約しなさい。

問2 「民主主義国同士は戦争をしないのだから、国際平和という目的を実現するためには、非民主主義国の民主化を進めるべきである」との意見があったとする。あなたはこの意見に賛成するか。上の問題文の内容をふまえて、あなたの考えを論じなさい。

※問題文は、篠田英朗『国際社会の秩序』（東京大学出版会、2007年）153頁－157頁を一部加筆修正したものである。

(以上)